

「文化」の現場を歩く

第1回

人材・施設・手法

静岡文化芸術大学教授

松本 茂章

奈良県川上村の「匠の聚」

◆人口1320人の山里

「あおによし」の大和は北部に人口が集中し、南部の山岳地帯は過疎に苦しんでいる。川上村も著しい村民減少に見舞われてきた。1970年の国勢調査では6020人だったが、2015年10月現在で1320人まで落ち込んだ。2005年に2045人がいたので、10年間で700人程度も減ったわけだ。住民の高齢化率は57・5%で、いわゆる「限界集落」に含まれる。

吉野杉の産地で知られる同村には戦後大きな二つのダムが建設された。農業用水確保のためにつくられた大迫ダムと伊勢湾台風の甚大な被害を経て建設された多目的の大滝ダムである。洪水防止、水源確保、発電などのための大滝ダムは村中心部の約800戸を水没させてしまったために賛否両論が噴出。予備調査から竣工まで53年もかかった。難航ぶりは「東の八ッ場ダム。西の大滝ダム」と言われた。ダム建設に伴って村内の道路が整備された。吉野川に沿って蛇行していた県道がトンネル等で直線化されたり拡幅されたりして便利になった。麓に下りても村まで通勤可能となったので人口減少を加速させてしまった。

2016年5月。筆者は大型連休を利用して村を訪れた。冬には積雪する山岳地域なのだが、5月の村は赤紫白の芝桜が咲き誇っていた。目指したのは年に一度のアートフェスティバルを開催中の村立文化施設、「匠の聚」である。近鉄・上市駅(吉野町)で下車し、駅前で川上村営やまぶきバスに乗り継ぐ。当初は数人の乗客がいたものの、村内に入ると筆者

1人が乗っている状態。約30分後、役場に到着した。村総務税務課によると、民間バス会社が乗降客減少に伴って村への路線バスを減便・廃止したので、2009年10月から近隣町村連携でコミュニティバスを走らせている。費用は1400万円。年予算28億8000万円の村にとっては痛い出費だが、「バス路線はうちの村の生命線」(同課)なのだ。

◆陶芸家らの移住を実現した文化施設

役場から車で15分の山間にある匠の聚は1999年に開館。鉄筋2階建てのセンター棟(延べ750平方メートル)にカフェ、展覧室、工房がある。周囲にはアトリエ兼住居7棟(1棟140平方メートル)が建ち並び、陶芸、彫刻、日本画などの作家が暮らしている。毎月の家賃は3万円、同共益費3500円である。併設されたコテージは、最安値で1泊2000円という安価な値段設定で、年間1500人が宿泊する。村長の栗山忠昭(1951年生まれ)2016年7月改選)が村産業振興課長時代に関わっ

た。「私たちの発信力には偏りがある。芸術家が村の活性化に貢献し全国に魅力を発信してくれるはずと考えた」と狙いを話した。

開館時に入居して住民登録した陶芸家と会った。銀縁の眼鏡にあごひげ姿という風貌の鈴木雄一郎(1969年生まれ)は、神奈川県茅ヶ崎市出身。東京



匠の聚のセンター棟。斜面の芝桜が満開だった

芸術大学美術学部デザイン科を卒業後、滋賀県信楽町で陶芸の窯元に勤めていた。そのとき新聞記事で匠の聚の開館を知る。信楽で出会って結婚した陶芸家の妻智子(1973年生まれ)と2人で応募した。「創作と生活のバランスがとれている。何よりも水がおいしい。カルキのにおいがまったくしない。本当にぜいたく」と笑顔で語った。2002年に長女が、2009年に二女が誕生。現在は長女の通う中学校のPTA会長を引き受けている。アートフェスティバルの際には自宅アトリエ前にテーブルとイスを並べ、自ら制作したスモークグリーンの器などを用いて食べ物を提供した。「ありのままを見ていただきたい。こんな暮らしがあるなら移住したいと感じてもらえただけなので仲間がほしいのだという。

◆運営する外郭団体

同聚は村の外郭団体・一般財団法人グ

リーンパークかわかみが管理運営する。開館以来勤務しているのは井上進哉(1975年生まれ)と上平伸太郎(1976年生まれ)の2人である。ともに村に生まれ、県外の大学に進学。卒業後Uターンした。近年は2人を慕ってコテージに泊まる馴染客が出てきた。センター棟カフェの壁には常連の村民が購入したコヒー回数券の束が多数壁に張り付けられている。地元に浸透してきた様子をうかがわせた。上平は東京農業大学で林業工学を学んだ。祖父は林業で父が会社経営。「長男だから戻ってこい」と家族に懇願されて帰郷した。「入居する作家さんたちは積極的に村の行事へ参加してくださり、本当に有り難い。指導してもらう陶芸教室や写真教室などを村民も楽しみにしている。今後はより若い芸術家の移住を期待している。村が活性化するか」と上平は述べた。

同財団は匠の聚のほか、政府登録国際観光旅館のホテル杉の湯を経営して人気

〈水源地の村〉が取り組む芸術家移住

を集める。深緑色のダム湖を見ながら檜の風呂で入浴を楽しむ。同ホテルは都市部との交流人口を一人でも増やすために1988年にオープンした。人口減少の村ではあるものの、両施設を建設できた背景には財政が比較的しつかりしていたからだ。村によると、大滝ダム建設が長期間に及んだために将来展望を描きにくくなった一方、ダムの存在によって全村が水源地域特別措置法の指定を受けた。受益者負担で道路、学校、上水道、病院などの社会資本整備が進められ、長年にわたり村の一般会計に資金を蓄積することができた。

◆山村生活に魅せられて

1320人の同村で13人の移住を実現することは1300万人の東京都では13万人に相当する。大きな数字である。定住促進課が新設された2013年以降に、9家族25人が移住してきた。今のペースで推移すれば、人口は1000人程度で落ち着くのではないかと予測される。たとえば……。総務省の集落支援員として村に住みついた早稲田緑（1985

年生まれ）は赤ちゃんを抱きながらアトフェスティバル会場に駆けつけた。2016年2月に長男を出産したばかり。横浜市出身で、地域おこし協力隊員として2013年6月に赴任。多彩な事業を立ち上げる一方、匠の聚にしばしば訪れ、運営を手伝ったり経営計画作成を支援したり。明るい話題を提供する「みどりさん」の経歴はユニークだ。歴史と文化の国際都市ウィーンに魅せられてウィーン経済大学に留学、2年間滞在した。帰国後、東京外国語大学に編入して戦争と経済の研究を始めた。

その後、機械翻訳ソフトを開発する都内の会社に勤めながら、お金だけで済まない時代について考えていたところ、インターネットで川上村の紹介記事を読み、「森が水をつくる」とは究極のアートだ」と感じた。「森とともに生きたい」と決意した。「ここでは旧暦で生活している。現代生活で見えなかったことが山で見えてくる。山の生活の価値を言語化していくことが私のライフワーク」と話した。

同フェスティバルの運営を手伝ってい

た佐藤充（1967年生まれ）も移住者の一人である。村地域振興課のコンシェルジュ（週3日）を務め、観光PR、定住促進の仕事、村ホームページの更新などを担当する。大手家電メーカーに勤めて営業部、商品企画部などで仕事をしたが、2012年の早期退職募集の際に手を挙げて退社した。北欧3国、インドシナ3国、モンゴルなど海外を旅し、退職金と蓄えをほとんど費やしたあと、「養鶏業でもしてみるか……」と2014年6月から同村に住みついた。「村に移住して運気が変わった。いい人との出会いが増えた」と笑顔で語る。女性からプロポーズされ、2015年4月に結婚式を挙げた。コンシェルジュの報酬に加えて定住促進の仕事、歴史のある丹生川上神社上社の留守番役などを合わせれば月20万円近くになり何とか暮らせるそうだ。村民たちとすつかり打ち解け、消防団第1分団の副分団長を拝命した。愛車の青いイタリア車で山里を走る日々だ。

人口が少ない分一人ひとりの価値は逆に重い。山里の取り組みは実に興味深い。

（敬称略）

